

# イギリス庭園紹介 5

中 田 久 雄

## ●ロンドン (LONDON)

### ③庭園史博物館

テムズ川に架かるラムベス橋の東詰、廃墟と化し解体の危機にあった旧セント メアライ アットラムベスの教会堂の建物を修繕利用した博物館である。同教会の由緒は旧く14世紀迄さかのぼるが、現在の建物は1851年に改築された物である。第2次大戦中破損し廃墟と化し、1972年には閉鎖された。1977年に至りこれを修繕して庭園博物館となすべくトラデスカント財団が結成され、事業を開始し、1983年に開館した。堂内はパネルで仕切った展示場と売店や軽食堂が備わっている。展示は園芸の歴史を通覧する物ではなく、17世紀の園芸家、プラントハンターの草分け、ジョン トラデスカント父子に関する事柄が主となっている。父ジョンは生年不詳で没年は1638年である。ハットフィールド宮殿の庭園の造営に関わる傍らヨーロッパ大陸に渡り、当時イギリスでは珍しい果樹や草花等を持ち帰った。後に国王チャールズ1世のお抱え庭師に就任した。同名の息子ジョンは更に足を延ばしアフリカやアメリカ大陸からも様々な植物をもたらし、父の後を次いで宮廷庭師となり晩年ラムベスに住んだ。又、ウィリアム ブライ のパンの木事件に関する展示も興味を誘う。18世紀イギリス政府は当時開拓中であつた西インド諸島に於ける奴隷の食料に供するため、南太平洋のタヒチ島に原生するパンの木を現地に移植することを計画した。その苗木採集のために軍艦バウンティイ号を派遣することになり、その艦長に選ばれたのがウィリアム ブライ であつた。1789年タヒチ島に於いて多数の苗木を養成し持ち帰る途中の洋上で事件は発生した。副長を首謀者とする乗組員の一団が反乱を起こし、船を乗っ取りブライとその同志18人をボートに乗せて流した。「バウンティイ号の反乱」として有名な事件である。ブライは歴戦の有能な船乗りであつたので、5,800km余りを47日間漂流の末、チモール島にたどり着き、翌年イギリスに帰った。1791年再度挑戦して成功し、以後パンの木は西インド諸島に広く普及した。この時の事情をパンの木とその果実の図解や船の甲板上に於ける苗



写真1 庭園史博物館

木鉢の配置図等を掲げて説明してある。

展示品中特に園芸用具のコレクションが見事で、17世紀の灌水桶や1832年の年記のあるバリカン式の初期の草刈り機その他多種多様な耕作用具等が整然と展示説明されている。

軽食堂の後ろの勝手口から出て教会堂の背後のトラDESCANTガーデンに至る。入り口左手の壁面に由来を記した大きな銘板が掛かっている。そこは墓地を庭園としたもので小さなノットガーデンが見せ場を作っている。財団

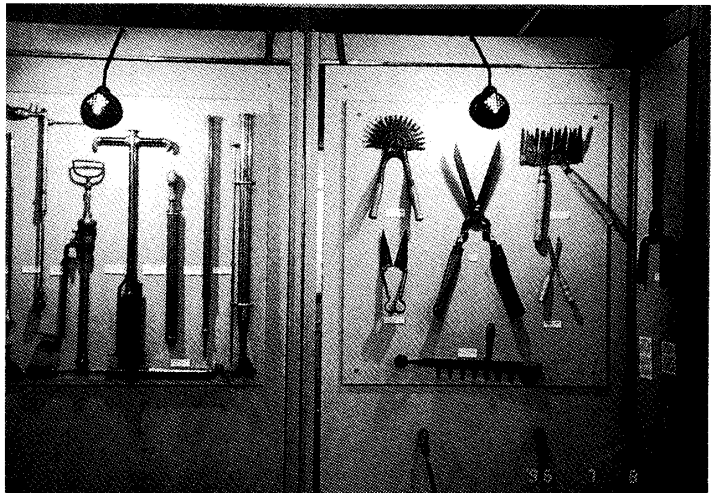


写真2 古い農機具の展示：庭園史博物館

総裁ソルズベリイ侯爵夫人の設計になる17世紀のノットガーデンを模したもので、低いツゲのヘッジで囲まれた10メートル四方位の正方形の中に、これもツゲのヘッジで直線と円弧を組み合わせた幾何学的な図形を作り、中心に螺旋状に刈り込んだ高さ2メートル程の斑入りのセイヨウヒイラギ「ゴウルデンキング」を据えたもので、ノットの中の植物はトラDESCANTに因む17世紀時代の種類が用いられていると言う。

この庭園の一隅にトラDESCANT一家とブライ一家の墓が隣り合っている。トラDESCANTのシンプルな方形の石棺の側面には採集旅行で出会った様々な危機の様子が彫刻されている。ブライの墓は家形の頂に巨大なアーン（壺）をのせた立派なもので、その側3面に「パンの木」に関するブライの事績、彼の妻エリザベスの事、夭折した彼等の子息並びに孫の死亡日時が刻まれている。

博物館の北隣にはカンタベリイ大司教のロンドン公邸、ラムベスパレスが建って居り、その背後は広大なラムベスパレスガーデンが広がっている。

Museum of Garden History

The Tradescant Trust

Lambeth Palace Road, London SE1 7LB.

Tel: (020) 7401 8865 ; Fax: (020) 7401 8869

チャリクロスの南約 1.5km、テムズ川右岸、ラムベス橋の東、ラムベスパレスロード(A3036)とラムベスロード(A3203)との交差点近傍にあり。地下鉄セントジェイムズパーク駅（環状線、ディストリクト線）、ウォータールー駅（ベイクールー線、ノーザン線）、ラムベスノース駅（ベイクールー線）より徒歩約15分。ヴィクトリア駅、ウォータールー駅より夫々バスの便あり。

開館日時：3月初旬-12月初旬；土曜日を除く毎日；10:00am-4:00pm(日曜日；5:00pm)

入館無料、但し応分の寄付を望む。標準は大人£2.50

軽食堂、トイレット、売店の設備あり。車椅子可。犬は要誘導。

## ●ウェイルズ (WALES)

グレートブリテン島の西部、北はアイリッシュ海、南はブリストル湾、西はカーデガン湾及びセントジョウジ海峡を隔ててアイルランド島に対し、東は1536年の合同時に設定された境界線でイングランドと接する連合王国を構成する公国である。ほぼ全域が古生代の岩石からなり、カムブリア山地を中心に準平原状の高原が卓越し、北部にはイングランド、ウェイルズ両地方の最高峰スノウドン山(1085m)が聳えている。偏西風とメキシコ湾流の影響を受けて特に海岸地域は気候温暖である。住民は先史時代からのケルト系でウェイルズ語が英語と同等に認められ、道路標識を始め公共の標識は英語と併記され、しかもウェイルズ語を先に記してある。人口の約2割に当たる50万人がウェイルズ語使用可能で特に北部や西部では日常語として使用されている。

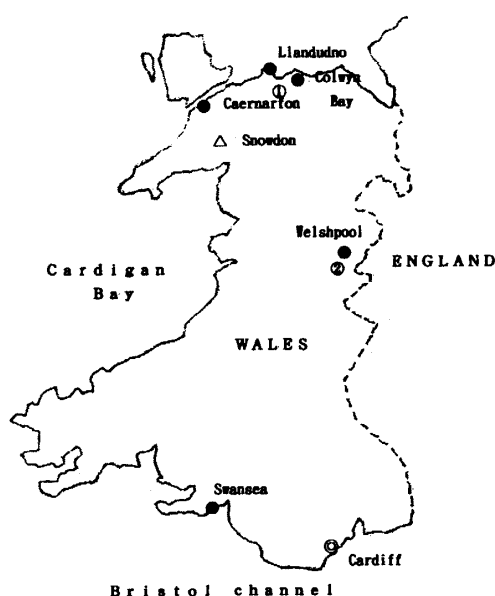


図1 ウェイルズ地図

- ①ボドナントガーデン
- ②ポウイスカースル

### ①ボドナントガーデン (Bodnant garden)

北部ウェイルズのコンウィイ川の西向き斜面に設置された32ヘクタールに及ぶ庭園である。庭園は上下2部からなる。上部は館の南面に広がる芝生と西面のテラスガーデンからなり、下部はコンウィイ川の支流ヒレスリン川の谷間の林地を利用した野性的なデルガーデンとなっている。この地はランカシアの人で化学工業で財を成したヘンリー デイヴィス パッチンが1874年に買収し、娘ローラとその婿、初代アバコンウェイ卿、チャールズ マクラレン 以下代々の後継者並びに3代に互る主任園丁、パドル一家の努力に依って今日に至っている。この間、1949年にナショナルトラストに寄贈されたがアバコンウェイ家は引き続きここに住み庭園の経営に当たっている。

駐車場から食堂建物の横を通過してコルウィンベイへ通ずる公道を横切り、庭園入り口から広い芝生イーストガーデン(トップローン)へ出る。円形の小さな池の前で現在の主任園丁のマーチンパドル氏から概要説明を受けた後、地図を頼りに園内を散策する。先ずフロントローンから館の前面を眺める。館は1792年の建造になり、当初漆喰塗りの典型的なジョージアンスタイルであったものをパッチンが拡張に際し青御影と黄色砂岩造りの壮麗な現在の姿に改造したと言う。一部フジやクレマチス等に覆われた館を眺めながら芝生を横切り館の西側にあるローズテラスへ出る。上下2

中 田 久 雄

段の敷石で舗装されたテラスに設けられた十数個の長方形のベッドの中に様々な花色のバラが色別に植え込まれ、矮性の宿根草が花壇の縁取りをなしている。階段を下りロウズテラスに平行した細長いクロケーテラスの芝生に降りる。クロケーテラスからノースガーデンを迂回して更に一段下のリリイテラスに下る。此処には大きな長方形と半円形の入り江を組み合わせたスイレンの池が中央部を占め、赤、白、ピンクや淡黄色の花色のスイレンが見事である。

スイレン池の半円部に沿った弓状の壁に沿った左右の下り階段の上のパーゴラにはツルバラが茂り、傍らにケアノツスの青やクリノデンドロンの赤が映える。階段の下には細長い下段ロウズテラスがある。ロウズテラスに沿って長いパーゴラが続き、その中央或いは末端の階段をカナルテラスに降りる。ここは幅10メートル、長さ80メートルばかりの水路に沿って芝生が敷き詰められ、その南端に美しいピンミルが建ち、北端には一段高く野外ステージが設けられている。その腰掛けに座ってスイレンを浮かべたカナルの水面に影を映すピンミルの白い姿が素晴らしい。ピンミルは元グロウスタチャーにあり針工場として使用され、後に皮革倉庫として用いられ廃屋の状態に在ったのを、第2代アバコンウェイ卿、ヘンリーが目をつけ1939年に移築修復したものである。解体輸送に当たっては、石材は勿論、木材や屋根瓦に至るまで運び込み慎重に復元したと言う。



写真3 リリイテラスから眺めた館：ポドナントガーデン

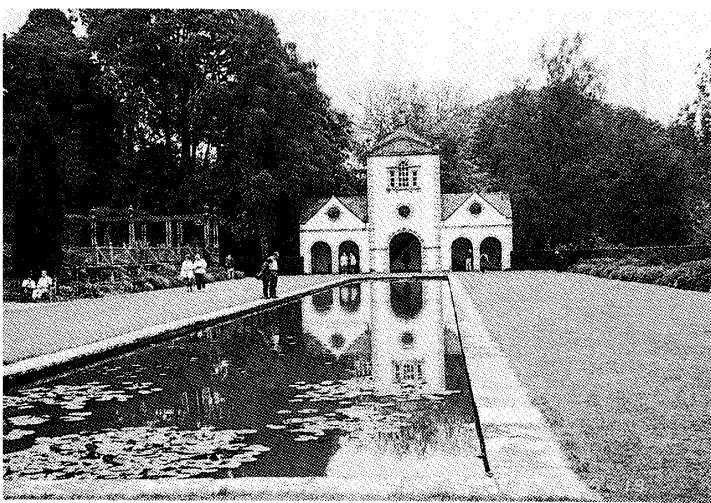


写真4 カナルとピンミル：ポドナントガーデン

ピンミルの裏から小川に沿ってデルガーデンへと下るのであるが時間的余裕が無く元に戻ることにした。再びリリイテラスを経て南端の出口から小川に沿って登り、楕円形の小池のある窪地に出る。ここは一応フォーマルに作られているのだが周囲の樹木や灌木の植え込みの具合で野趣に富んだ静かな場所となっている。坂道をフロントローンに登るとカバの大木の幹を廻って八角形の木製ベンチが作り付けてあり、其処に腰を下ろして館を遠望するのも良い。フロントローンの南端を横切り、ラウンドガーデンに至る。

ラウンドガーデンは直径30メートル程の円地を敷石で四つ割にし、中心に小さな噴水池を置き、

各区画に様々な矮性灌木を植え込んだ開けた一画である。外周にもアザレアその他の花木が植えられている。更にトップローンの南端の歩道を庭園入り口に向かい、すぐ右折して此の時期（5月）当園の最大見せ場の一つとなっているキングサリのアーチは見逃せない。幅5メートル余りの少々カーヴした道の両側50メートル程の距離に数十本のゴウルデンチェイン（キングサリ）の木を植え、枝を鉄骨アーチに誘引しトンネルとしたもので、5月から6月にかけて天井一面に長さ30センチメートルばかりの黄金色に輝く花穂が下がり、まさにゴウルデンレイン（ゴウルデンチェインの別名）である。キングサリはヨーロッパ中南部原産でイギリス各地でも珍しくないがこれほどの規模のアーチは格別であろう。帰り道は一旦、館の方へ戻り隣接のプラントセンターの中を通り出口に至る。

#### Bodnant Garden

#### National Trust

Tal-y-Cafn, Colwyn Bay, Conwy LL28 5RE.

Tel: (01492) 650460 ; Fax: (01492) 650448

ランドゥノ或いはコルウィンベイから 12.8km 南、A470から分岐 800m の所に入り口あり。

開園日時：3月中旬-10月末毎日：10:00am-5:00pm

入園料：大人：£5.20、小人：£2.60、団体（20人以上）：各£4.70、ナショナルトラスト会員及び王立園芸協会会員は入園無料。

軽食堂、トイレット、プラントセンター、売店在り。車椅子可、園内一部不可或いは難所在り。但し迂回路あり。犬は駐車場内のみ可。但し要誘導。

#### ②ポウイスカースル（Powis Castle）

中部ウェイルズの東端イングランドとの境に近いウェルシュプールの郊外の丘の中腹に建つポウイスの城の歴史は遠くイングランドとの抗争時代以来で古く且つ複雑である。ウェイルズの中世の城塞は殆ど荒廃したがポウイスは保存の価値ありとして生き残り、16世紀にサー エドワード ハーバートの手に入り、大規模な修復と増改築が行われ、17世紀の内戦に際し王党派に加担したために議会派に占領されたが王政復古により回復した際に更に大規模な増改築が行われた。此の時代の遺構は18世紀の火災により一部消失し、1772に更なる改築が第2代伯爵、ジョウジ ハーバートに依って行われた。その結果ジョウジは莫大な借金を残して死んだが、妹が幸いにもインド征服の立役者クライヴ将軍の息子、エドワードと結婚していたので、その息子即ちジョウジの甥が第3代伯爵として後を継ぎ城と庭園の維持発展に努めた。

第4代伯爵夫人、ヴァイオレットは、衰退しつつあった庭園を「イングランド及びウェイルズに於ける第一級の庭園に仕上げる」と言う意気込みで修復改造に取り組み、その甲斐あって庭園は現在の姿に整備された。1952年に庭園を含む資産はナショナルトラストに寄贈された。

駐車場からゆるい傾斜地が続き、その途中の芝地に、当日は日曜日でスプリングフェアのスペシャルデイとして種苗を載せた台を並べたプラントセンターの出店が出ていて多数の客が群がっていた。ゲイトハウスを通り城の前庭に出ると中央にペガサスの石像があり、その周辺にも店が出ていた。正面に城の主屋が聳え、左手に低い別棟の長い袖が付随し、売店や食堂がある。その一室

## 中 田 久 雄

でスティヴン レイシイ 氏のスライドショーを見る。氏は庭園関係の評論、著述、講演、解説、司会者として広く活躍中の周知の人物である。氏の言によれば「今のイギリスの一般の庭は、色彩豊かで美しい花であれば何でもかんでも取り込んで、その結果出来上がった物はフルーツサラダの様なものだ。そこへ行くと日本の庭はどんなに小さくとも夫々ポイントがあつて、それは石であつたり、水流であつたり、その他一木一草みな意味をもっている」と少なからず買いかぶり或いは、イギリス人一流のお世辞とも取れるが、なるほどと納得出来ぬこともない。そこで氏の御推奨のイギリス庭園の取って置きのスライド写真を見ながら解説を聞くと言う趣向である。

古本市の開かれている城の楼門を出ると、左手に細い下り坂の道があり庭園入り口になっている。さらに左折して城に平行して進めば主屋の下のトップテラスに出る。ここからの眺めは格別で、眼下の大芝生、その先の果樹園、整形形式庭園等を隔てた先に美しいウェイルズの田園と山並みが壮大な景色を展開している。テラスの欄干の上には鉛製の巨大な壺が数個飾つてある。

左手の階段を一段下のエイヴィアライテラスへと下る。ここはトップテラスの下の岩盤を掘り窪めて空間を作りエイヴィアライとし、その前面をテラスとしたものである。エイヴィアライとは鳥小屋の事で昔は鳥を飼っていたが、現在は非耐寒性植物の収容に充てている。エイヴィアライの前の欄干の上にも鉛製の壺と4体の羊飼いの男女の像が飾られている。エイヴィアライにはフジが纏わり此の時機（5月中旬）花盛りである。その左右にはボーダーが長く連なり、東側には暖色の、西側には寒色の草花が植栽されている。

欄干の両側の立派な階段の何れかを下るとオランジュリイテラスに至る。ここもエイヴィアライテラスの下を同様に掘り窪めてオランジュリイとしたものである。オランジュリイとは昔、オレンジを冬季の寒さから保護するための施設のことである。現在は各種行事の展示室として使われている。オランジュリイの前面は小さな整形形式庭園に造成され、左右に長いボーダーが連なり、整形形式庭園の階段は下のアップルスロウプテラスへ通じている。テラスの北東側には各段を通じて巨大なイチイのヘッジがあり、その先の整形形式庭園やクロケーローンを仕切っている。このヘッジは当園の一つの見せ場で高さ10メートル以上、厚さも数メートルは有ろうかと思われる。オランジュリイテラスからそのヘッジに作られた洞穴を潜ってツゲのヘッジの続くゆるく曲った細い坂道を下る。このボックスウォーク（ツゲの道）は左側が高さ6メートルばかりの平面に、右側は人の背丈ほどの円形に刈り込まれていて、両者の間は巾1メートルもないので行き交う人は互いに譲り合わねばならぬ。下り切って直進すればユウウォーク（イチイの道）、左折すれば整形形式庭園へと通ずる。整形形式庭園は何の飾りも

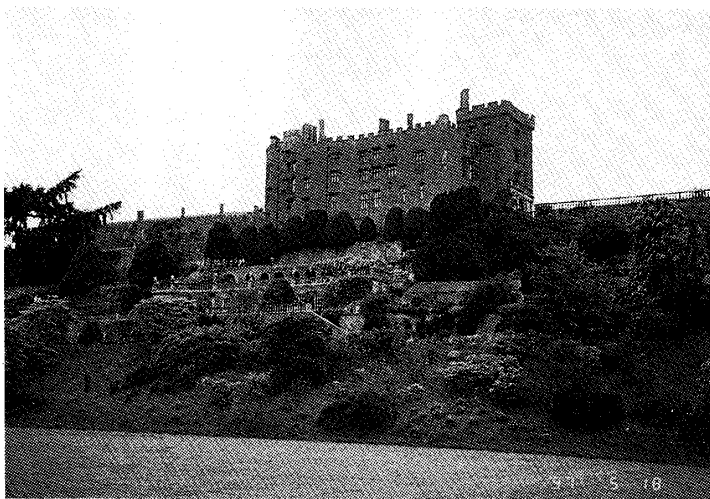


写真5 グランドローンから眺めた城館とテラス：ポウイスカースル

ない広い芝生である。その周囲に下生えに地被植物を植え込んだ2例の整形された古い品種のリンゴの樹列と、東端にゴウルデンマヨラムを下生えにしたブドウのアーチが延びている。

整形形式庭園の東、城から見れば最奥端にファウンテンガーデンがある。片隅に日時計、反対側に噴水盤を設け円く刈り込んだイチイのトピアリイを配置し周囲をイチイやツゲのヘッジで囲



った長方形の小さな整形形式庭園である。写真6 ユウの巨大ヘッジ：ポウイスカースル

ベンチに腰を下ろし、彼方に幾段もの

テラスの上に聳える城の姿を仰ぎ見るのも又格別で、バビロンの吊り庭もかくやと思われる。

ユウオークに戻りテラスの下に広がる1ヘクタールに及ぶグレイトローン（大芝生）を右手に見ながらテラスの向かいに横たわるイーストバンクの林地の山道を辿る。この辺りはワイルダーネスと称し野趣豊かな所で、野鳥の囀る木々の間から見え隠れする城とテラスの佇まいも一興である。グレイトローンに続く、早春一面のラップスイセンの黄色に埋まるダッフオディルパドックを見ながら右に緩くカーヴし、サウスバンクを経て庭園入り口に戻る。

Powis Castle

National Trust

Welshpool, Powys SY21 8RF

Tel: (01938) 551920 ; Fax: (01938) 554336

e-mail: powiscastle@nationaltrustorg.uk

ウェルシュプールの南1.6km. A483沿いにあり。案内標識あり。

開場日：4-10月；水-日曜日、毎日開場、7、8月；火-日曜日、何れもバンクホリデイは開場

開場時間：庭園；11:00am-6:00pm、城内；1:00pm-5:00pm

入場料：庭園のみ；大人：£5、小人：£2.50、家族連れ：£12.50、団体：各£4、ナショナルトラスト会員は無料。

城内と庭園：大人；£7.50、小人；£3.75、家族連れ；£18.75、団体；各£6.50、ナショナルトラスト会員は無料。

駐車場完備。売店、喫茶、軽食堂、トイレット、プラントセイルあり。身障者可。ピクニック可。犬は不可。

## ●アイルランド共和国

アイルランドは1949年イギリスから独立して共和国となりイギリス（ユナイテッドキングダム）とは全く別の国なのだが、今日でもイギリスで発行されている通俗の案内書などにはイギリスに含

まれていて、中にはスコットランドやウエイルズよりも先に北部アイルランド(今でもイギリス領)と共に記載されているものがある。

アイルランド島は北西大西洋に浮かぶ面積7万平方キロメートルの低平な島で、東及び南東はアイルリッシュ海とセントジョウジ海峡を隔ててブリテン島に対し、北は北海、西及び南西は大西洋に面している。暖流と偏西風の影響を受け温暖湿潤で、殆どの地域で年間降雨日数が200日を超えるため通年濃い緑が保たれている。動植物相はイギリスやヨーロッパ大陸と似ているが種類は少ない。住民はケルト系であるが、長年に亘る他民族の侵入移住による混血が進みアイルランド人特有の身体的特徴は見られぬと言う。憲法により第一公用語がアイルランド語、第二公用語が英語と定められているが、日常の言語生活は殆ど英語によると言う。1973年にE E Cに加盟し、99年通貨統合に加盟した。



図2 アイルランド地図

- |             |            |
|-------------|------------|
| ①バリーマロウ料理学校 | ⑤キルモケア     |
| ②バタストリム     | ⑥マウントアッシャー |
| ③クレアガーデン    | ⑦ブリムロウズヒル  |
| ④ディロンガーデン   | ⑧ラムハウスガーデン |

①バリーマロウ料理学校 (Ballymaloe Cookery School)

料理学校付属の庭園で、一部整形式、一部風景式に設計された土地に菜園と果樹園が設けてある。別に広大な畑があり、様々な食材が栽培されている。

ティムとダリナのアラン夫婦が1983年に開校した料理学校は順調に発展し今やヨーロッパ屈指の料理学校となり内外から受講者が集まって来る。受講期間は長期で12週間、短期では半日乃至6日まで、料理のみならず園芸からライフスタイルに至るまで様々なコースがある。又教員スタッフは常任の他、有名ホテルやレストランのシェフを客員講師として招いている。

ブナのヘッジで囲まれ、互いにトンネルで往来出来る幾つかの整形式ハーブガーデンやキッチンガーデンは低いツゲのヘッジで仕切られた様々な形の小区画が多数設けられ、中に各種のハーブや野菜が植栽されている。野菜は食用と鑑賞用を兼ねた種類が選ばれていると言う。これらは皆学校の教材として用いられる。ブナのヘッジを潜って隣接の果樹園に入ると我が国では珍しいメドラが樹間を広く取って植栽されている。整形式庭園を出ると広い芝地の中に何列かの畝を作って各種野菜が植栽され、その外側を防風林が囲んでいる。両側に宿根草花壇を備えた芝道の奥に8角形の石



造小屋が建っており、中に多数の貝殻が飾ってある。これはダリナが育った場所が海から離れていたため貝殻に強い関心を持ち集めた物であると言う。

校舎の前に戻ってフルーツガーデンと書いてある低い扉を押して中に入る。金属製のアーチに誘引された各種果樹の見本園である。特に料理用のリンゴの品種コレクションが見事である。その他クランベリーを始めとするベリー類、イチジク、モモ、スモモ、ナシ、マルメロ、メドラ等が所狭しと植栽されている。

Ballymaloe Cookery School Gardens

Tim and Darina Allen

Shanagarry, Co. Cork

Tel: (021) 646785 ; Fax: (021) 646909

e-mail: enquiries@ballymaloe-cookery-school.ie

web: http://www.ballymaloe-cookery-school.ie

コークーウォーターファッド街道N25をコークの東20kmのミドルタンからR629をバリイコットンの方へ約5km、途中シャナガリイの手前左側にあり。

開園日：4－9月；毎日公開

開園時間：11:00am－6:00pm、カフェ；11:00am－9:00pm

入園料：€5

喫茶、軽食堂、トイレット、売店あり。犬は誘導を要す。

## ②バタストリイム (Butterstream)

この庭園は1970年代の始めにジム・レイノルズが重粘な土質と気候変動が大きく強風や霜害を被り易く、野兎や放牧家畜の食害に悩む不利な立地条件を巧みに克服し、20年に及ぶ努力の結果仕上げた一種の芸術作品である。従って一見何の脈絡もない異なったスタイルを組み合わせた不規則な形をしているが、中へ入って見ると一風変わった趣のある庭園である。

ブナのヘッジを背にして「バタストリイム庭園、11AM－6PM、毎日開園、入園料£3」と記し

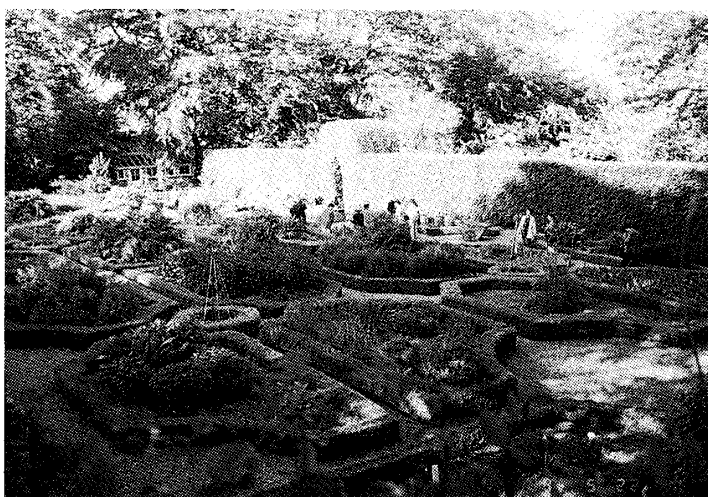


写真7 ハーブガーデン：バリイマロウ料理学校



写真8 野菜畑：バリイマロウ料理学校

た立て札が建っており、傍らのさして広くもない芝地に「バタストリウムへようこそ、車は芝の上に駐車をどうぞ」と記した半畳程の立て看板が置いてある。又一方には「如何なる状況下でも花を摘み取るべからず、犬は入園お断り、潜在的危険箇所があるから子供には確りと注意あり度し」との注意書きの立て看板が置いてあり、如何にも個人庭園の趣がある。

木柵で囲った四角い広場の右隅から小川を渡り右折すればストリウムガーデンに古ぼけたゴシック調木造橋や木造工作物を発見する。これらは古い遺物の様に見えるが1995年築造のジムの手造りだと言う。戻る様にしてグリーンウォークからブナのヘッジで囲まれ、暖色の草花を植え込んだ花壇で整形的に仕立てられたホットカラーガーデンやオールドローズガーデンを経てホワイトガーデンへと続く。ここのポイントは片隅に建つ円錐屋根を乗せた円筒形の石造二階建の白い塔である。これは鳩小屋を模した物で、一見1世紀以上も経ている様に見えるが築後10年程の経過に過ぎない。二階の窓からホワイトガーデンを見下ろせる様になっている。ホワイトガーデンはやはり周囲をブナのヘッジで囲み、中を低いツゲのヘッジで四つ割にし、中に白を基調にした植物が植栽されていて、シシングハーストのホワイトガーデンを連想させるものがある。

ホワイトガーデンから少々広い不整形の宿根草花壇の右隅にあるキングサリのトンネルを抜けると、正面にオベリスクが立ち、その周囲にピラミッド型のツゲのトピアリイを方形に配置したオベリスクガーデンが見える。その左手に巾5メートル長さ10メートル程の長方形の小池があり、鯉が泳ぎスイレンが浮かんでいるローマ調のプールガーデンがある。池の対岸に4本のトスカナ式円柱を配した小さなテンブルが立ちその前面に螺旋状に刈り込んだツゲの鉢植えが4個並び、テンブルを中心に低いツゲのヘッジが取り囲んでいる。

宿根草花壇へ戻り、少々広い芝生を抜け、木戸を潜ったその先に素晴らしい建物やカナルや菩提樹の並木の続くイタリア風庭園があるのだが、時間的余裕がなく一瞥して手前の道から外に出る。出口に立派な石造門が建っていて、駐車場からの入り口の木戸とは全



写真9 ホワイトガーデン：バタストリウム



写真10 ローマ風プールガーデン：バタストリウム

く対照的である。これは最後に築造したイタリア風庭園への正門として建造された物であろう。庭園と駐車場芝地を限る林地とそれに続くブナのヘッジに沿って元に戻る。

#### Butterstream Garden

Jim Reynolds

Tel: (046) 36017 ; Fax: (046) 31702

Kildalkey Road, Trim, Co, Meath

ダブリンの北東約40km、N3から R154を経てトゥリムの西郊にあり。

開園日：5月－9月、毎日

開園時間：11:00am－6:00pm、団体は予約を要す。

入園料：€6

トイレット、植物販売所あり。車椅子は一部制限あり。犬は不可。

### ③クレア ガーデン (Creagh Gardens)

1945年造園開始以来の8ヘクタールに及ぶ自然風景式庭園である。緑色に塗った門を通った右側に受付小屋があり、そこから真っすぐに伸びる道路の右側に深紅の花を付けたチリアンファイアツリイの大木が見事である。やがて道路は疎林の彼方にイレン川の河口の水面が光るクレアハウス前の広場に至る。クレアハウスは石造三階建てで表面は橙黄色に塗装されている。入園料とは別に幾らかの寄付を納めて屋内を縦覧する事が出来る。各部屋には古いピアノや調度品が飾られ、食堂には宴会用の華麗なガラスウェアがセットされている。

館の裏手の芝生を抜けて、石塀で四角く囲ったウォールドガーデンに入る。中には各種野菜や果樹の植わったキッチンガーデンと家禽小屋がある。ガラス室にはブドウが植わり、外国には珍しい平棚作りとなっている。ウォールドガーデンを出て塀に沿って行くと、やがて鬱蒼とした森の中に曲がりくね

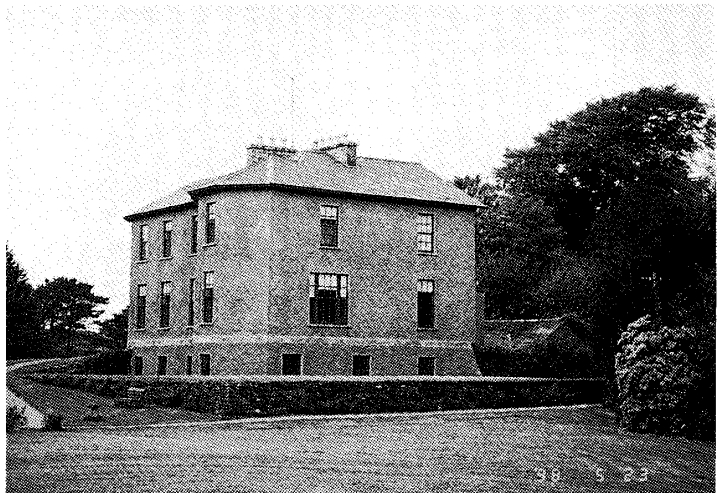


写真11 クレアハウス



写真12 ミルポンド：クレアガーデン

中 田 久 雄

った水路、ミルポンドに至る。岸边にはシャクナゲを始め各種の灌木や水湿植物が茂り、兩岸の大木の枝が水面に覆いかぶさり、深山幽谷の趣をなす。水路の途中から入り江の岸边に出る。係船所の芝地には黄色のハリモクシュの花が美しい。入り江の渚沿いに揚船場やボートハウスへの道が通じているが、右手の芝地の中の道を館前へ戻る。

Creagh Gardens

Skibbereen, Co. Cork

Tel ; Fax: (028) 22121

Gwendoline Harold-Barry Trust

スキバリンの南西6.4 km、R595沿いに在り。

開園日：3-10月、毎日開園

開園時間：10:00am-6:00pm

入園料：大人；€4、小人；€2.50

案内、茶の用意あり。要予約。

トイレット、車椅子用トイレットの設備あり。犬は入園不可。

④ディロンガーデン (The Dillon Garden)

ダブリンの中心から2キロメートル程南の住宅地にある小規模な個人庭園である。家屋の前面に敷石舗装を施し、その一部に方形に細かい砂利を敷き詰め中にアルパインを主に、その他乾燥を好む草花を植え込んだ平床花壇が設けられ、低い樹木や灌木が玄関先を飾っている。家屋の背後には巾10メートルにも満たぬ細長い芝生が20メートル程続きその末端に正方形の敷石を敷き詰めたペイヴドガーデン(舗装庭園)があり、その中に円形の低いツゲのヘッジに囲まれた子供の裸像が立っていて、その先端から少量の水が噴き出る噴水となっている。ヘッジの中は砂利が敷き詰められ、流出した水は砂利を通して自然に地面に吸い込まれる仕掛けになっている。このペイヴドガーデンも低いツゲのヘッジで四角く囲まれている。芝生の両側は草花やその背後に低い灌木を植え込んだボーダーとなっている。様々な植物が密植され我々の眼から見れば雑然とした感じだが、園主

のヘレン ディロン 女史によれば植栽に当たっては適材適所を旨とし入念にデザインしてあると言う。左手奥には少々高い樹木を植え込んだ林地を思わせる一隅があり、そこからピンクや白や濃紫色の洋種オダマキ等の丈の高い草花の彼方に見える家屋の姿も又美しい。家屋は半地下を含めた淡い茶褐色の石造三階建てで半地下は園芸資材置き場と作業場になっている。半地下の上に客間があり、少々高所から園地全体



写真13 家屋と前庭の一部：ディロンガーデン

をうかがう事が出来る様になっている。

**The Dillon Garden**

Helen & Val Dillon

45 Sandford Road, Ranelagh, Dublin 6

市の中心から車で10分、徒歩30分。

サンドファッドロード(R117)から右折してサンドファッドクロウズへ入り、更に左折してサンドファッドテレースへ入り直ぐ。この道は行き止まり。

公開日：3、7、8月；毎日公開。

4、5、6、9月；日曜日のみ公開。

公開時間：2:00pm-6:00pm

入場料：大人：€5

団体：庭園のみ：€5、庭園入り口から入園のこと

家屋を通過して庭園へ：€7、客間にて少時の説明あり

庭園及び家屋：€10、客間にて少時の説明あり、食堂にて茶或いはコーヒー並びにビスケットの接待あり。

子供は縦覧謝絶（修道院協定によるものは除く）。愛玩動物は不可。駐車は路上。



写真14 メインガーデン：ディロンガーデン

**⑤キルモケア (Kilmokea)**

1998年に公開された新しい庭園であるが、その造園は1947年に着手された。館はアイルランド教会の司祭館として1794年に建てられたものである。最後の住人となった司祭はグリア師で1937年トレモーで水泳中に溺死した。その後、館と土地はイザベル スミス 夫人に売却され、更に1947年にデイヴィッド プライス 氏に売却された。プライス氏は世界各地から集めた植物を植栽した2.8ヘクタールの庭園を造成した。1997年プライス氏の死後資産は現在の所有者ヒューリット夫妻に売却され、彼らは館、庭園、馬車置き場等を現在の姿に修復した。

館は灰褐色の、地下室付き石造総二階建てで、寄せ棟屋根の上には低い集合煙道と8本の個別煙突をのせ、左右に袖が付き、玄関には4本の白いトスカナ式円柱を配した往時を偲ばせる立派なものである。

庭園は全く趣の異なる二つの部分からなる。館の直ぐ裏に広い芝生とその片側にバラ園、ハーブ園、フランス式



写真15 クジャクのトピアリ：キルモケア

中 田 久 雄

菜園等が並び、パーゴラやガゼボ\* を設けた整形式造園があり、少々非整形式の趣をなすトロピカルガーデンへと続く。その先は道路を隔てて、一転して鬱蒼とした山道となり、少々広い不整形の鱒池や小さなリレイポンドを下り、カメラウォークやシャクナゲの道を迂回して元に戻る。その間所々に野草の植栽あり、流水あり、小池あり自然豊かな趣である。



写真16 キルモケアハウス正面

上の芝生に戻り整形式庭園の反対側の宿根草ボーダーに沿って館の方に戻るとロジgia\*\*や池を配したイタリア風庭園に至る。館の袖の延長には鳩小屋が建っている。

\*ガゼボ(Gazebo)：庭園を眺めるための庭園内建築物。見晴らし用の四阿屋。

\*\*ロジgia(Loggia)：片側に壁のない歩廊。開廊

Kilmokea House and Gardens

Mark & Emma Hwelett

Great Island, Campile, Co. Wexford

Tel: (051)388109 ; Fax: (051)388776

e-mail:kilmokea@indigo.ie

ニューロスの南8kmにあり。R733を南下しJ. F. ケネディイアーバリティタムの標識を過ぎ、Sカーヴを通過して直ぐ「キルモケアガーデンズ」の標識に従い右折、2.4kmの地点にあり。

開園日時：3-11月：毎日：10:00am-6:00pm

入園料：大人：€5、2才以下の同伴小児：無料、

16才までの小人：€2.50、20人以上の団体：12.5%以内の割り引きあり。

駐車場、トイレット(車椅子可)完備。犬は要誘導。喫茶、軽食堂、プラントショップあり。

#### ⑥マウントアッシャー(Mount Usher)

ヴァートリイ川の兩岸に造成された8ヘクタールの長方形の自然風景式庭園である。1868年ダブリンの事業家、エドワード ウォルポウルがこの地を買収し、以後4代100年以上に亙り丹精し、アイルランドに於ける最も傑出した庭園の一つに仕上がった。その後1980年にマドライン ジェイ夫人が継承し更に手を加えて今日に至っている。

キングサリのパーゴラを潜り、事務所兼売店の中を通過して狭い果樹園を右折しメイプルウォーク(カエデの道)を進めば間もなくヴァートリイ川の岸に出る。幅10メートル内外の緩い流れで、

岸辺すれすれに或いは少々高く歩道が続く。この辺りの草地は全くの自然の野原の景観でキンポウゲの黄色が目映い。対岸は樹木や灌木が茂り鬱蒼としている。流れには所々に堰が設けられ小さな滝を成している。やがて野趣に富んだ吊り橋が見え、渡れば芝生の彼方に瀟洒な家屋が見えるがこの部分は縦覧謝絶となっている。更に水流に沿って歩道を進み振り返れば、幾段もの小堰を設けた流れを隔てて見える家屋の姿が美しい。更に下ると小橋が架かり対岸に南半球原産の植物や暖地植物のコレクションが見られる。戻って流れから離れクロケーローンに続く長く伸びたアザレアウォーク（ツツジの道）を歩く。左右に色とりどりのツツジが咲き競っている。アザレアウォークの末端の木立の中に四阿屋が建っている。此处から斜面に平行に元に戻る道があり、この辺りは深山の趣を呈しブナの大木の樹林中に赤、白その他色とりどりのシャクナゲが咲き競っている。

吊り橋まで戻り、橋を渡り流れに沿って溯ると小池があり更に進むと小流があり湿地植物が茂っている。再び川岸の歩道を溯る。兩岸の樹木は鬱蒼と茂りこの辺りも深山幽谷を思わせる。川の中洲の岩の上に一羽のアオサギが置物と見まがうばかりに立っている。暫くの後飛び立って行ったので本物と判る。案内書によるとこの鳥は馴染みの客らしい。更に溯り、小橋を渡れば出発点の入り口建物に戻る。

Mount Usher

Mrs Madelaine Jay

Ashford, Co. Wicklow

Tel: (404) 40116/40205/40483 ;

Fax: (404) 40205

e-mail: mount-usher.gardens@indigo.ie

web: www.mount-usher-gardens.com

ダブリンの南48km、ウィックロウの北西 6.4km、アシュファッド村、N11 沿いにあり。

開園日時：3月15日－10月31日、毎日；10:30am-5:30pm

入園料：大人；€6、老人、学生、小人；€5

団体（20人以上）：大人；各€5、小人、老人；各€4

案内ツアー（要予約）；€30

喫茶室、売店、トイレ完備。車椅子可。



写真17 ヴァートリイ川と家屋：マウントアッシャー



写真18 アザレアウォーク：マウントアッシャー

⑦プリムローズヒル (Primrose Hill)

ルカン村のメインロード（旧道）からプリローズレインの緩い坂を上り詰めると、そのままプリムローズヒルの入り口になっている。二階建て家屋の正面右脇から庭園へ入る。家屋に接して設けられた囲いの中に中国原産の白色大輪のボタンが咲き競っている。芝生を中心に2ヘクタール余りの略々水平の園地に花壇が設けられ、洋種オダマキ、サクシフラガ（ユキノシタ属）、白花のアルメリアその他の主として宿根草が植栽されている。オーナーのロビン ホール氏によれば、「庭園植栽は適地適作を旨とすべきである」と言い、当園では、そのための適否試作と育種を中心に事業を行っている。従って鑑賞庭園と言うよりも試験圃場の趣が強く、開園日も2、6、7月と言う特殊な庭園である。



写真19 白花のボタン：プリムローズヒル

Primrose Hill

Mrs Cicely and Mr Robin Hall

Lucan, Co. Dublin

Tel: (01) 628 0373

ダブリン市街からN4を西に約8km、ルカンの標識に従い右折、村落を通過してプリムローズレインの標識を左折。

開園日：2、6、7月、毎日

開園時間：2月；2:00pm-5:00pm、

6、7月；2:00pm-6:00pm

入園料：大人；€4、小人；€2.5、団体；各€4

トイレット、プラントショップあり。車椅子、犬は不可。



写真20 洋種オダマキのボーダー：プリムローズヒル

⑧ラムハウスガーデン (Ram House Garden)

ダブリンとウェクスファッドの間にある全くの個人庭園である。道路沿いの2ヘクタールばかりの土地に、家屋を中心に展開する庭園とやや下がった窪地にある林地からなる。入り口門の傍らにはキングサリがあり、黄金色の花穂が歩道を覆っている。家屋は白亜の総二階建てで、大戦中は陸軍の将校宿舎として接收されていたと言う。家屋の前は直系20メートルばかりの芝地で周囲に宿根



花壇が設けられ、色とりどりの宿根草が花盛りである。家屋の後方には砂利を敷き詰めた間に高山植物を植えたアルパインガーデンがある。敷石舗道に架かったパーゴラをくぐり抜けると小さな日時計を置いた芝地があり傍らのベンチに腰を降ろして一休するのも良い。家屋の裏に煉瓦造りの旧馬屋があり今は農具や資材置き場と作業小屋として使われている。傍らに昔懐かしい手押しポンプがさりげなく立っているのも今となっては面白い。庭園に隣接した飛び石の緩い坂を下るとシラカバその他の樹木を植え込んだ林地があり、狭いながらも一時の静寂を覚える。

一巡りして前庭に戻ると、茶席の用意が出来ていて、ロロ夫人のお手製のお菓子の御馳走に与かる。白い紙ナプキンを花びらに見立て、中心に手焼きのケイキを置き大輪のボタンになぞらえたもので、一同みな大喜びであった。ご主人のゴッドフリー スチーヴンス氏も終始我々にも分かり易い英語で御

説明を賜り、斯く御夫婦そろっての心のこもった御持て成しは個人庭園ならではの雰囲気であり、一同皆再度訪問の意を強くしたことであろう。

Ram House Garden

Lolo and Godfrey Stevens

Coolgreany, Co. Wexford

Tel: (0402) 37238 ; Fax: (0402) 31205

ダブリンからN11を南下、アークロウを過ぎて、ダブリンから約50km のインシュの手前を右折、クールグリニイ村へ、約2kmの地点に在り。

開園日：5－8月末の金、土、日曜日及びバンクホリデイ\*

開園時間：2:30pm－6:00pm。

入園料：€3.50、アルツハイマー協会への寄付を請う。

車椅子不可、犬不可、子供は同伴を要す。軽食の便あり。

\*アイルランドのバンクホリデイは、6、8月の第一月曜日及び8、10月の最終月曜日。



写真21 日時計のローン：ラムハウスガーデン

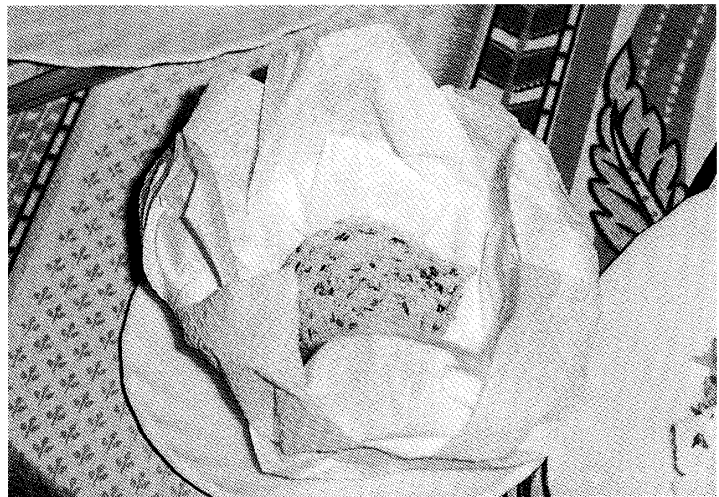


写真22 ロロ夫人の手造りケイキ：ラムハウス

参考文献及び資料

1. King, Peter : The good gardens guid 2000. Bloomsbury Publishing Plc. 2000
2. Bodonant Garden and Jarrold Publishing : The Garden at Bodonant. Jarrold Publishing. 1994
3. Eclare, Melanie : Gloious Gardens of Ireland. Kyle Cathie Ltd. 2001
4. Lacey, Stephen : Gardens of The National Trust. National Trust Enterprises Ltd. 1997
5. Madelaine Jay : Mount Usher Gardens. Eason & Son Ltd. 1984.
6. The National Trust : Powis Castle Garden. National Trust Enterprises Ltd. 1992
7. 白幡洋三郎 : プラントハンター. 講談社. 1994
8. Young, Geoffrey : Walking London's Parks and Gardens. New Holland Publishers Ltd. 1998
9. Heritage: 112, 75-78. 2003
10. 各庭園案内パンフレット、リーフレット及びインターネットホームページ

※訂正

紀要第31号(1999) 231ページ末に「ヘルファッド川の河口云々」とあるのは、「ファルマス湾の海岸云々」の誤りで、ロウズマリアン岬を隔てた南側がヘルファッド川の河口となる。